

先生って、どんな人？

— 保育者・大場牧夫の絵本『せんせい』を学生向けの教材として読み解く —

池田邦子

On “Our Teacher is ‘It’”: Re-examination of Makio Ohba’s Picture Book with Special Reference to Teaching Material for Childcare Students

Kuniko Ikeda

I. 本発表の課題

幼稚園・保育所などにおける保育者の役割は、極めて大きい。そして、その担うべき社会的な任務も、時代の変化の中でより重いものへとようになってきた。例えば、厚生労働省が「保育所保育指針」改定に際してまとめた『保育所保育指針解説書』（2008年3月）では、「保育士の専門性」について、次のように述べている。

「保育士の専門性としては、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術などが考えられます。」¹⁾

これらは一応「保育士の専門性」となっているものの、職務内容の共通性から、「幼稚園教諭の専門性」として読み取ることも十分に可能である。その意味では、両者に通じ合う「保育者の専門性」を整理したものにとらえることも、あながち間違っはまい。

ところで、そうした多様な役割を担い、果たすべき任務が高まってきている「保育者の専門性」について、幼稚園教諭・保育士をめざす学生たちに教科書の記述だけで伝えることはなかなか難しく、実習前の段階では、映像教材や現場見学（観察実習）などに依存することも多い。しかし、映像教材は簡単に観ることができるものの、その内容を読み解くために必要なリテラシーは高度なものであり、映像そのものが一面的であるため、「ビデオ鑑賞」に終始することも少なくない。また、現場見学（観察実習）についても、実際の場面に参与することで多様な学習の機会が用意されるけれど、「エピソード」に裏打ちされている保育者の「援助」を探る機会としては、時間や学生指導などの面で制約が大きい。

本発表では、そのような現状を踏まえ、「保育者の専門性」について扱う講義での教材の1つとして、大場牧夫・文、長新太・絵『せんせい』（福音館書店、1992年、1996年）という絵本に注目する。本書

は、幼児向けの「科学絵本」として創作・出版されたものではあるけれど、あえて「保育者の専門性」という視点から読み解くこともできる。そうした視点に立ってとらえ直した時、本書からは何が浮かび上がってくるのか。また、それらは、保育学生向けの教材として、どんな可能性を有しているのだろうか。本発表は、そのような課題意識を持ちながら、絵本『せんせい』を読み解く試みである。

なお、作者及び画家の共同作業に基づく絵本を研究対象として取り上げる以上、画家と「絵」についても、少なからず触れねばならないであろう。しかし、本発表の目的は、あくまでも絵本に対する芸術的な分析ではないことから、長新太個人には触れず、彼による「絵」の扱いも「印象批評」レベルでとどまらざるを得ない。長新太の「絵」に込められた思想などを含め、本書の総合的な分析については他日を期すこととしたい。

Ⅱ．保育者・大場牧夫と絵本『せんせい』

絵本『せんせい』の文を書いた大場牧夫（おおばまきお）は、1931（昭和6）年に茨城県水戸市で生まれた²⁾。旧制水戸第一中学校と新制水戸第一高等学校を経て、茨城大学文理学部に入学し、心理学を専攻している。

卒業後、1955（昭和30）年に桐朋幼稚園の教諭となり、以後、1992（平成4）年の同園退職まで、一貫して学級担任の職にあった。その間、白梅学園短期大学や東洋英和女学院短期大学、青山学院大学、立教女学院短期大学、大妻女子大学大学院などの非常勤講師を務めたものの、専任の誘いには応じず、“生涯学級担任”の信念を通したとされる。

また、大場は、自らの取り組みを踏まえて、子どもの園生活についての「三層構造」論を提唱した。とりわけ「表現」指導を生かした保育実践の経験は、1994年11月に胃がんで他界するまで、大学の講義等で積極的に生かされたという。

一方、1964（昭和39）年における「幼稚園教育要領」改訂では教材等調査委員を、1989（平成元）年の改訂においては調査協力者会議の委員を務め、現場の意見を反映させている。日本保育学会でも、理事を歴任した。

そうした経歴もあって、著書は非常に多くのものをまとめている。主要なものをあげれば、次の通りである（一部に没後の出版も含み、下線が絵本となる）。

編著『保育の実践と理論』ひかりのくに、1969年。
単著『幼稚園時代——4-5才児のこころと生活』日本放送出版協会、1971年。
共著『保育者の目』教育出版、1973年。
単著『幼児の生活とカリキュラム——三層構造の生活プラン』フレーベル館、1974年。
単著『保育への提言——かけてゆけ子どもたち』フレーベル館、1978年。
共著『これからの保育（全6巻）』フレーベル館、1978年。
編著『集団の中で子供たちはどう育つのか——カメラで探る領域〔社会〕』世界文化社、1981年。
共著『大場牧夫保育対談——幼児教育の本質を求めて』フレーベル館、1981年。
共著『保育の再点検（全5巻）』フレーベル館、1983年。
単著『〔新版〕幼児の生活とカリキュラム——三層構造の生活プラン』フレーベル館、1983年。
編著『幼児と社会——社会指導の理論と実際』萌文書林、1984年。
共編著『幼稚園・保育所実習の主活動の選び方と設定の仕方』萌文書林、1986年。
単著『幼児教育の基本を考える』ひかりのくに、1988年。
共編著『幼稚園教育要領解説（平成元年告示）』フレーベル館、1989年。
単著『新幼稚園教育要領「領域」を考える——実践への手がかりとして』ひかりのくに、1989年。
共著『主体性を育てる保育へ——これからの保育を考える』世界文化社、1990年。
共著『子どもと人間関係——人とのかかわりの育ち（新保育内容シリーズ）』萌文書林、1990年。
共著『ごちそうラディッシュ（ハツカダイコン）——はたけのあおむしとこどもたち（かがくのとも254）』福音館書店、1990年5月（絵は舟橋全二）。
共著『幼稚園・保育所実習の活動の考え方と計画・展開の仕方』萌文書林、1990年。
共編著『人間関係（新・保育内容研究シリーズ2）』ひかりのくに、1990年。
共著『保育内容総論——保育内容の構造と総合的理解（新保育内容シリーズ）』萌文書林、1992年。
共著『せんせい（かがくのとも277）』福音館書店、1992年4月（絵は長新太）。
共著『子どもの「自由」って、なに?』世界文化社、1993年。
共著『ごちそうラディッシュ（ハツカダイコン）——はたけのあおむしとこどもたち（かがくのとも傑作集）』福音館書店、1994年（絵は舟橋全二）。
単著『原点に子どもを——大場牧夫の保育論』建帛社、1994年。
単著『表現原論——幼児の「あらわし」と領域「表現」：フィールドノートからの試論（新保育内容シリーズ）』萌文書林、1996年。
共著『せんせい（かがくのとも傑作集）』福音館書店、1996年（絵は長新太）。
単著『〔第二版〕表現原論——幼児の「あらわし」と領域「表現」：フィールドノートからの試論（新保育内容シリーズ）』萌文書林、2000年。
共著『〔改訂〕子どもと人間関係——人とのかかわりの育ち（新保育内容シリーズ）』萌文書林、2000年。
共著『〔改訂〕保育内容総論——保育内容の構造と総合的理解（新保育内容シリーズ）』萌文書林、2000年。

これらの他、「環境構成」などに関する各種解説書の監修も手がけている。また、保育関係雑誌への寄稿も少なくない。

そうした著作の中で、大場牧夫が著した絵本は、『ごちそうラディッシュ（ハツカダイコン）——はたけのあおむしとこどもたち』と『せんせい』の2冊となる。いずれも、福音館発行によるソフトカバーの月刊絵本『かがくのとも』として発行され、後に「かがくのとも傑作集」というハードカバー版で出版し直されている。

絵本『せんせい』が刊行されたのは、大場が現場を退職した1992年のことである。幼稚園の「せんせい」をやめるという年に、この絵本が世に出ていることはとても興味深い。おそらく、彼は、万感の想いを込めて執筆したのではないだろうか。

また、その当時は、1989年の「幼稚園教育要領」改訂及び1990（平成2）年の「保育所保育指針」改訂を経て、保育内容・方法のあり方が25年ぶりに見直され、保育者の役割をめぐっての議論も非常に盛んな時期であった。そうした意味では、本書が、「幼稚園教育要領」の大改訂がなされた後に刊行され、「せんせい」の持つ多様な役割を示したことも、歴史的に見て面白い。

Ⅲ. 絵本『せんせい』を読み解く

絵本『せんせい』は、前述したように、福音館書店発行の『かがくのとも』第277号（1992年4月号）として初版に当たる「ソフトカバー版」が出された。また、その改版となる「ハードカバー版」は、1996年2月15日、「かがくのとも傑作集」の内「わくわくにんげん」シリーズの1つとして出版されて版を重ねており、2004（平成16）年11月10日の発行分で5刷を数える。

このような形で、絵本『せんせい』には2つの版がある。現在も流通しており、入手しやすいのは「ハードカバー版」となる。したがって、本発表では、以下、主として「ハードカバー版」をテキストとし、適宜「ソフトカバー版」を参照していくことにしたい。

「ハードカバー版」の大きさは、裏表紙の奥付によれば、縦26cm×横23cmとなる。ページ数は、28ページと記されており、左開きの造本である。これらは、他の「かがくのとも傑作集」と基本的に変わらない。

対象年齢は、同じく裏表紙の上部に「4才～小学校初級向き」とあり、前者が「読んであげるなら」と、後者が「自分で読むなら」とそれぞれ添え書きされている。これも、他の「かがくのとも傑作集」と基本的には変わらない。

本書は、前述の通り、扉を含めて全28ページからなる。一部の例外を除いて各ページにはページ数が振られており、扉が1ページ目に当たる。前後の見返しについては、効き紙があるものの、遊び紙はない（「ハードカバー版」は、基本的に「ソフトカバー版」を改装しただけである）。したがって、前見返し（効き紙）と扉（p.1）、最終ページ（p.28）と後見返し（効き紙）の2つを含めた場合、見開きの数は全部で15となる。

まず、表表紙は、画面上部に「せんせい」の大きな文字が配置され、その下に「大場牧夫・ぶん 長

新太・え」と書かれており、それぞれの人名にはフリガナが付けられている。絵は、背景に“地平線”が引かれ、上を黄色に、下を茶色に塗った状態である。そして、その中央全体に「せんせい（女性）」の姿（下半身でスカートをはいている）がピンク色の影形で描かれ、足元（両足の間）には3匹の亀が入った小さな水槽を置き、左側に女兒、右側に男児が1人ずつまとわりついているというものである。男児の足元（画面右下）には、「かがくのとも傑作集」とシリーズ名も記されている（ちなみに、「ソフトカバー版」では、タイトルと作者名の位置が少し下がり、その上部に「月刊 かがくのとも 4」と印刷されており、「ハードカバー版」にあるシリーズ名はない）。そうして「せんせい」を影形に描いたことで、「不思議な存在」としての先生を予感させるものとなった。

第1見開き（前見返し、p.1）は、左面（前見返し）は山吹色の効き紙で、右面（p.1）に扉を置かれていることから、後者のみが場面となる。文字は、表表紙と同じく画面上部に「せんせい」の大きな文字が配置され、その下に「大場牧夫・ぶん 長新太・え」と書かれているものの、フリガナは付けられていない。作者名の下には、幼稚園（保育所）の門と園舎・園庭、遊ぶ子どもたちの姿が描かれている。これは、表表紙に続いて、「園生活」をイメージさせるような演出となっているのであろう。そうした絵の下には、「福音館書店」と出版社名も記されている（ちなみに、「ソフトカバー版」では、「福音館書店 1992」と年号も添えられていた）。

第2見開き（pp.2-3）は、左側（p.2）の画面中央、一面白色の背景にピンク色の女兒と黄色の男児が影形で描かれ、その上方には「ねえ、みんな している？」という問いかけが書かれている。そして、右側（p.3）は、それを受けて「せんせいって、ときどき うまだよ」との投げかけがなされ、「ポニーテール」で眼鏡をかけた馬の「せんせい」が登場する。背景は茶一色で、片足をあげ、ポロシャツ（胸には「せんせい」と記されたハンカチの名札）の黄色と緑チェックのスカートを身に付けたピンク色の馬が、“先生=馬”という大胆な発想をいかにも象徴している。

次の第3見開きは（pp.4-5）は、左面（p.4）で第2見開き右面の投げかけに対する答えを、右面（p.5）において新たな投げかけを示す形式となる。こうした形は、第13見開き（pp.24-25）までずっと続いていく。この見開き左側では、「ねっ！ ぱっか ぱっかの おうまさん」という種明かしがなされ、文の下には、前ページの馬が人間の先生に変わり、四つん這いになって子どもたち2人を背中へ乗せて遊ぶ様子が描かれる。白一面のバックだけれど、先生の周りには2人の子どももおり、奥にはカバンを掛けたロッカー、ザリガニのいる小型水槽が画面左側にあるため、保育室での楽しげな一瞬を切り取った感じがよく出ている。一方、同じ見開きの右側には、「せんせいって、ときどき オニだよ」という新たな投げかけが置かれる。文に合わせるように、その下部は、ポニーテールで眼鏡を掛け、太い金棒を右手に持った鬼の全身像が配置されている。“地平線”の上下がピンク色と黄色に塗り分けられた背景、茶色の肌に白色のTシャツ（やはり胸には「せんせい」の名札）と黄・緑の横縞が入ったスカートを着た鬼、牙をむき出しにして威張っている姿が、再び大胆な投げかけを象徴する。

第4見開き（pp.6-7）は、「ねっ！ おにごっこの オニ わーっ、にげろっ」という左面（p.6）で始まる。白いバックの画面右上部に男児6人の逃げる姿が、それを追う人間の先生が左下に描かれている。右下には雲梯も置かれており、園庭で楽しく遊んでいる雰囲気がよく伝わってくる。他方、右面（p.7）については、「せんせいって、ときどき おすもうさんだよ」という文が示され、顔が

「せんせい」の「おすもうさん」という大胆な姿を茶色の画面いっぱいに描いている。ポニーテールが鬘形に結われ、色白の顔とピンク色の肉体が塗り分けられている姿は、まるで“肉襦袢を着ている”ような感じである。豪華な化粧まわしには「先生」と漢字で大きく書かれており、「せんせい」というフリガナも付けられている。

続く第5見開き（pp.8-9）では、その左面（p.8）において、「ねっ！ とっても つよいんだ」という答えが明かされる。その絵は、スカート姿（！）の先生が園庭で男児1人と相撲を取っている様子であり、ピンク色の土俵の周りには応援する3人の子どもたちも描かれている。白色の背景には、画面左側奥に鶏小屋、右奥には庭木が配置され、園庭での楽しい遊びの雰囲気伝える。また、同じ見開き右面（p.9）は、ピンク色の画面に、ポニーテールで眼鏡を掛け、緑色のポロシャツ（ここでも左胸には「せんせい」の名札）を着た狼が描かれているものである。その文は、もちろん「せんせいって、ときどき おおかみだよ」であり、両前足をあげて、大きな口を開け、舌尖からよだれを垂らしながら襲いかかろうとする絵に呼応している。しかし、ユーモラスに描かれているため、ほとんど恐怖感はない。

第6見開き（pp.10-11）については、左面（p.10）の絵が、劇遊びの様子を取り上げたものとなっている。「ねっ！ げきあそびでは おおかみでしょ」という文の下に、白と黄に塗り分けた“地平線”が置かれ、黄色の舞台上では、狼のお面を付けた先生が、お婆さんに化けて赤頭巾ちゃんを待ちかまえる。舞台左には「あかずきんちゃん」の“めくり（寄席の高座下手（=左）に置かれる出演者の名前などを書いた紙の札のこと）”が、右側には大道具の木が置かれており、観客である子どもたち6人の頭も画面下に描かれている。一方、右面（p.11）は、上下を茶色とピンク色で塗り分けた“地平線”の背景の中央に、目をつぶって正座する先生の姿がある。その前にはお茶も置かれており、画面上には「せんせいって、ときどき おきゃくさんだよ」と書かれている。

次の第7見開き（pp.12-13）は、左面（p.12）において、「ねっ！ ままごとの おきゃくさんさあ、どうぞ」という形でなげかけの答えが示される。絵は、白と茶の上下で塗り分けた“地平線”を背景とし、園庭を表現する茶色の地面にはゴザが引かれ、その上で3人の子どもたちと先生がままごと遊びをする様子である。奥には鉄棒（支柱に小鳥がとまっている）と庭木（猫がのぞき見をしている）も描かれており、画面全体で楽しげな印象を与えている。また、同じ見開きの右面（p.13）は、全面黄色の背景に、「せんせいは かんごふさんだよ」という一文が記され、看護師姿の先生が走っている様子を描写したものである。その左胸には、「せんせい」と書かれたネームプレートも付いている。

第8見開き（pp.14-15）では、解答編に当たる左面（p.14）が、「ねっ！ めの ごみを とって くれたよ」とされる。文に対する絵は、屋内の手洗い場横で、泣いている男児が先生に眼の辺りを拭いてもらう場面である。足元には救急箱が置かれ、その横には心配そうに見つめる女児の姿、奥にある台の上には小型水槽も描かれている。それまで「遊び」に関わる存在であった先生が、ここでは「生活」の場面でケアをする者として象徴的な形で描かれることになった。一方、右面（p.15）は、「せんせいは おとうさんだよ」という投げかけがなされており、絵もかなり大胆なものである。茶色の背景に、幼い子どもを肩車している先生が配置され、その髪型は「ハゲかつら」をかぶり、鼻下には「チョビ髭」も付けてウインクしている。これは、もともと先生自身が眼鏡も掛けていたことから、かつてザ・ドリ

フターズに加藤茶が扮装して一世を風靡した姿にそっくりである。

第9見開き（pp.16-17）は、左側（p.16）で、「ねっ！ おとうさんと おんなじ かたぐるまじょうず」と記され、保育室において先生が子どもを肩車する姿を描いている。その足元には、自分もして欲しいとねだる3人の子どももおり、子どもに親しまれている先生の様子が上手くとらえられたと言える。一方、見開き右側（p.17）では、「おとうさん」に続いて、「せんせいは おかあさんだよ」という投げかけがある。その絵は、全面ピンク色の背景の中央に、赤ちゃんを抱く先生の姿となっている。

続いて、第10見開き（pp.18-19）である。その左面（p.18）は、「ねっ！ おかあさんと おんなじ あったかい ひざ」という文の下に、保育室のピアノの前で先生が2人の子どもを膝に載せ、微笑んでいる場面が描かれている。先生の周りには、子どもたち3人がやってきて、自分も乗せてとねだっており、前述した第9見開き左側の「おとうさん」に重なる形である。また、右面（p.19）については、先生が台所で鍋を持って料理する姿に、「せんせいはほんとうの おかあさんだよ」の文が添えられており、あえて「ほんとうの」という一節を加え、第9画面の「おかあさん」とは別の意味でとらえていく。

第11見開き（pp.20-21）は、左面（p.20）において、「ねっ！ せんせいの おうちにも こどもがいるんだって」と、自宅の食卓で我が子に食事を与える先生の姿が描写される。ここでは、あえて保育現場を離れ、先生にも、読者である子どもと同じく家庭での生活がある点を取り上げて、同一視をさせている。一方、見開き右面（p.21）の上には、「せんせいは こどもだよ」とある。上下をピンクと黄色に塗り分けた“地平線”の背景のもとで、子どもになった先生が走って猫を追いかけており、その左胸には「せんせい」という名札も付いている。

次の第12見開き（pp.22-23）では、あえて先生の大失敗を取り上げる形で、前の見開き右側に対する意外な解答が示され、さらに投げかける言葉も発展していく。左面（p.22）の答えは、「ねっ！ またころんだ こどもみたいでしょ」と書かれおり、園庭のすべり台の前で玩具の自動車に足を取られて転倒する先生の姿が描かれている。その周りで3人の子どもたちが大はしゃぎをし、前の画面で追いかけていた猫も左隅の植木鉢のところに登場する。そうした意外な展開を受けて、右面（p.23）では、第9見開き右側から第11見開き左側への流れと同じく、「せんせいはほんとうの こどもだよ」と記される。その画面は、前面茶色の背景で、中央に人形を抱えた子どもの先生が描かれたものである。

第13見開き（pp.24-25）については、左側（p.24）で、「ねっ！ せんせいにも おかあさんがいるんだもの ははのひには プレゼントを あげるんだって」との答えが示される。その絵は、先生が自分の母親にカーネーションの花束を渡している場面であり、2人の間には猫も描かれている。一方、右側（p.25）では、「せんせいはね、こぶたの せんせいだよ うそじゃないよ」と投げかける。文の下には、“地平線”の上下がピンク色と黄色に塗り分けられた背景、その画面中央には丸々太った豚となった先生が描かれている。その手には出席簿を持ち、眼鏡とポニーテール、「せんせい」の名札も忘れていない。

続く第14見開き（pp.26-27）は、左面（p.26）において、「こぶたぐみ」の扉の陰から8人の子どもたちと先生が顔を出し、「ねっ！ こぶたぐみの せんせいなんだ」と、笑顔で読者に語りかける。他方、同じ見開きの右面（p.27）には、「せんせいって、うまで、オニで、おすもうさんで、おおかみ

で、おきやくさんで かんごふさんで おとうさんで、おかあさんみたいで、ほんとうのおかあさんで、こどもみたいで、ほんとうのこどもで、こぶたのせんせいで そして…」と、それぞれの絵が縦2列に各6つずつならんだ小さな楕円の中へと再び示されており、今までのまとめという形になっている。

そして、最後の第15見開き（p.28、後見返し）は、左面（p.28）の中央、白単色の背景で、子ども4人が大きな箱の中に入り、先生が上から笑顔で見守っている場面を置く。その絵の上には「わたしたちの せんせい!」、下には「せんせい せんせい、あそぼう! あそぼう!」と記されている。子どもたちにとっての先生の位置づけが、明確に示されたラストである。ちなみに、今回の調査で、「ソフトカバー版」の一部（見本誌）において、下の文が「さあ、せんせい、なにして あそほ!？」となったものが確認されているけれども、「せんせい せんせい、あそぼう! あそぼう!」という形の方が、「子どもの主体性」を強調しており、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の趣旨に合致するものであろう。なお、右側（後見返し）は、第1見開きの左側と同じく山吹色の効き紙で何も描かれていない。

裏表紙は、上下を茶色とピンク色で塗り分けた“地平線”の背景の中央に、スカート姿の先生の下半身が黄色の影形で描かれたものであり、表表紙と違って子どもは描かれていない。また、それに替わって、その足元には本書の奥付が記載されている。

IV. 学生向け教材としての絵本『せんせい』

以上、本発表では、保育者・大場牧夫による絵本『せんせい』へと注目し、「保育者の専門性」ということを意識しながら読み解いてきた。最後に、本書の読み解きを通して何が浮かび上がり、それらを踏まえた時、保育学生向けの教材としては、どのような生かし方があり得るのかを、次の3点から簡単に仮説的な形で示しておきたい。

第1に、本書で描かれている保育者の姿は子どもに対して多様な側面を見せており、そこに表現された役割が「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の趣旨に沿うものと見なされる点である。2008（平成20）年3月に告示され、次年度から施行予定の「幼稚園教育要領」では、第3章「指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等 に行う教育活動などの留意事項」において、「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が多様なかわりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者、共同作業など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること」と記されている。それは、「保育者も環境の中の一つなんだという保育者環境論」を示すものなのだけれども、講義などだけでは学生の理解を引き出すことが非常に難しい³⁾。本書は、そうした点を補う教材として位置づけることができよう。

第2に、保育者を優れた「職業人」だけでなく「生身の人間」として、その生活や失敗なども描き、読者と変わらない存在だということをしつかり押さえている点である。本書の「ソフトカバー版」折り込み付録では、本書の意図について、「先生には、職業人としていろんな側面があること、また園から離れれば、先生にも家庭があり、家族がいて、ひとりの生活者としての多面性があること——そのことが、この絵本を通して子どもたちに伝われば!と願いました」と記されている⁴⁾。学生の指導では、とかく優れた「職業人」としての側面を強調し過ぎて、「生身の人間」であることを伝え損ねがちとな

る。そうした意味で、本書のユーモラスな描写の数々は、保育者としての「アイデンティティ」を形成する途上にある学生が、保育者の人間像に目を向ける格好の素材となろう。

第3に、本書の文が読者に対する投げかけの形式を取っており、その種明かしが次のページにあるという構成から、読者に考える楽しさを与えているという点である。そうした「2拍」のリズムによる構成は、読み聞かせや一人読みで、絵本のページをめくる心地よさを生み出す⁵⁾。また、読者への投げかけと答えの積み重ねは、「『作者から読者への意図的な働きかけをめざす』ことが、より効果的に読者の考え方を引き出し、思考を促す」という「科学絵本」の本質を生かすものにもなっている⁶⁾。「かがくのとも」の1冊として、子どもを対象に著された本書は、そうした構成と認識・思考を深化させる工夫が施されているところから、保育を学ぶ学生に向けた活用も、十分に意味を持つと考えられる。

引用文献

- 1) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008年、pp.19-20。
- 2) 大場牧夫の経歴については、遺稿集『〔第二版〕表現原論——幼児の「あrawし」と領域「表現」：フィールドノートからの試論（新保育内容シリーズ）』（萌文書林、2000年）の「著者紹介」に拠った。
- 3) 大場牧夫『幼児教育の基本を考える』ひかりのくに、1988年、p.26。
- 4) かがくのとも編集部「先生って、どんな人？」（『かがくのとも』福音館書店、第277号、1992年4月、折り込み付録）。
- 5) 成美堂出版編集部編『絵本をつくりたい！——楽しくはじめる絵本づくり』成美堂出版、2007年、p.49。
- 6) 瀧川光治『日本における幼児期の科学教育史・絵本史研究』風間書房、2006年、p.276。

※ 本稿は、日本乳幼児教育学会第18回研究大会（2008（平成20）年11月29日、於・大阪キリスト教短期大学）における同題の口頭発表用レジュメを加筆・修正したものである。

